

又九州に有、肥前の丸木舟、其長さ三間半餘底ひらたく、兩かは丸木のごとく、是もろくい高くして、片手に早緒をにぎり、片手漕にする、是を丸木こぎと云といへり、其外國々に有、

〔書言字考節用集七器財〕丸木舟<sup>マルコブチ</sup>。

〔閑窓瑣談四〕丸木船

房州安房郡山刀村に船越大明神と云社あり○中神前にさげたる古代の丸木船二艘あり、長サ一丈六尺、幅の間五尺餘にて、木色は薄紫なるが何といふ木なりや知者なし、唐木にて造りし船なりとのみ云傳ふ、

〔古事記垂仁〕故率遊其御子○本牟遲之狀者、在於尾張之相津、二俣作二俣小舟而持上來以浮倭之市師池輕池、率遊其御子、

〔古事記傳二十五〕二俣小舟は、二俣榪以作れるなれば、其一木のかぎりを、二俣の間に、鑿れる舟なるべし、

〔日本書紀十履仲〕三年十一月辛未、天皇泛兩枝船于磐余市磯池、與皇妃各分乘而遊宴、

〔名物六帖器財二舟楫桴筏〕獨木剝舟星槎勝覽、蘇門答刺國民、網魚爲生、獨木舟<sup>ボ</sup>同上、駕獨木舟來貿榔實、全木船<sup>ボ</sup>選東文

〔書言字考節用集七器財〕船<sup>ボ</sup>木勾略、空中<sup>同</sup>虛舟<sup>クモ</sup>也、冲舟<sup>クモ</sup>又作<sup>クモ</sup>

〔倭訓栞中編三〕うつぼぶね 獨木剝舟をいふ、星槎勝覽に見えたり、元祿中、朝鮮の舟、東國に漂著せしに、其船大木を二ツに割て、それをくりて、よせて一艘とせし獵船なるべし、

〔平家物語四鶴の事

よりまさ、きつと見あげたれば、くもの中に、あやしき物のすがた有、○中矢とつてつがひ、南無八幡大ほさつと、心の中にきねんして、よつひいてひやうとはなつ、手ごたへしてはたとあたる、えたりやおうと矢さけびをこそしてんけれ、○中さてかのへんげの物をば、うつぼ舟に入て、なが